

# ブータンの多言語市場における多言語会話の展開

## —多言語性に対する寛容さと市場の「場」の特性からの分析—

佐藤 美奈子 (京都大学)

### 1. 目的

世界では、ヨーロッパ発の「多言語主義 (multilingualism)」が「あたかもア priori に肯定的な価値」(砂野 2012: 13) をもって非ヨーロッパ世界へも広がりを見せる一方で、その移植先のアジアやアフリカで不具合や歪みを引き起こすなど、新たな問題が報告され始めている (杵掛 2008; 米田 2012; 塚原 2012; 他). そのような世界情勢をよそに、19 もの言語を擁する多言語社会ブータン王国 (以下、ブータン) では、「One People, One Nation」(平山 2019: 129) をスローガンとする政府が、ブータンの国語であるゾンカ語を国民アイデンティティの核とすべく一元的言語政策を展開し、伝統的な多言語社会との二極化が生じている. 本研究は、国内の多様な言語が一堂に会する多言語市場で展開する、複数の言語による会話—多言語会話—に着目する. 市場では、モノの売り買いという目的の明確さと、売り手と買い手という独自の人間関係のもと、通常の言語活動とは異なる独自の言語選択が観察される. 本研究が特に着目するのは、会話の当事者双方がそれぞれ異なる言語を用いて会話を展開し、傍からみるとまるで2つ (もしくはそれ以上) の会話が並行して進んでいくように思われる、「相互乗り入れ型」(泉 2009: 44) 会話と呼ばれる会話である. 世界の多言語社会を対象とした研究においてたびたび報告されながらも、実際に生じることは稀有といわれるこのパターンが、ブータンの多言語市場では「標準的」に観察されるのはなぜか. ブータンは、現在、学校教育を受けた人と受ける機会がなかった人が混在する過渡期である. 市場の商人や客のほとんどは学校教育によってではなく、多言語社会における日々生活や仕事のなかで複数の言語を習得した複言語話者である. 本研究は、ブータンで伝統的に育まれてきた「多言語状態 (multilingualism)」に、学校教育普及の過渡期という時代性、さらにモノを売る者と買う者という市場独自の人間関係が言語選択にどのように影響し、多言語会話を生み出しているのか、その動因と過程、そしてそれがもたらす機能を明らかにする.

### 2. 「相互乗り入れ型」会話 (泉 2009: 44)

泉 (2004: 44) は、「媒介言語としての複数言語使用のタイプ」(泉 2004: 44) として、CS型やクレオール型、等、言語切り替えのさまざまな形を分類する. そのなかで、ひとつの対話において、話し手と聞き手の間で別の言語が用いられる形で言語の混在がみられるものを「相互乗り入れ型」(泉 2009: 44) の会話と呼ぶ. 泉 (2004) によれば、当該型の会話が成立するためには、話し手と聞き手が共に相手の言語コードについての知識をもち、それを共有しているという条件が必要となる. しかしながら当該型は、通常頻繁に現れるものではないこととされる (泉 2009). 話し手と聞き手が対等の能力をもつ場合、「相互乗り入れ型」ではなく、どちらか一方の言語に収束されるか、途中で言語を切り替える CS型が選択されるのが普通だからである. では、どのような状況で「相互乗り入れ型」(泉 2009: 44) 会話は生じるのであろうか. 言語能力と心的態度の2つの面からその促進要因を考察する.

#### 2.1 受容能力と産出能力の格差

多言語社会における言語切り替えについては、Poplack (1980) が切り替えパターンと話者の言語能力の関係性を指摘している. 先行研究からは、移民の言語能力が移住先での滞在期間と比例する形で変化し、それに伴い言語切り替えのパターンにも相違が生じることが指摘されている (LiWei and Milroy 1995; Backus 1998; Singh and Backus 2000; 吉田 2014). たとえば、吉田 (2014) は、言語シフト (language shift) の観点から移住者の言語切り替えに着目し、日本へ移住した韓国系民族学校高校生の発話についての自身の事例研究 (吉田 2005) において、発話で選択される言語や CSの特徴が来日時期によって相違があることを明らかにした. そして、移住者の日常言語が (移住者の) L1 を基盤とした挿入型の言語切り替えパターン (insertional CS) から、二言語の能力が高まるにつれて交替型の言語切り替えパターン (alternational CS) へ移行する一般的な傾向が存在するとする、Singh and Backus (2000) の指摘が実証されたとし、

当傾向を「世界の移住者集団に共通する特徴」(吉田 2014: 151)と呼んだ。泉(2009)は、「相互乗り入れ型」会話について、当会話が生じるのは、完全に共通語化されるに至っていない習得途上の言語状態においてであると指摘する。受容能力と産出能力の獲得の困難さの相違が、「相手の言語を聞いて理解する(受容能力)」分には対応可能であるが、「自分の意見を発する(産出能力)」には十分とはいえないという能力の格差を生み、それが話し手と聞き手による異なる言語の併用をもたらす要因となるという(泉 2009)。

## 2.2 「ハイブリット」な状況の肯定

能力的要因に加え、「相互乗り入れ型」の会話が生じやすい心的態度として、泉(2009)とHamel(2003)が指摘するのが、「どの言語を用いてもよいとする明示的あるいは暗黙の取り決め」(泉 2009: 50, 53)が存在し、「ハイブリット」な状況が肯定的に受け入れられる(Hamel 2003)環境である。Grosjean(2008: 9)が「部分能力」と「相補的原理」という言葉で適切に説明するように、複数の言語能力をもつ複言語話者とは、そのすべて言語について、「完全な(そのようなものがあれば)母語話者並みの言語能力をもつことを意味するものではない。「相互乗り入れ型」の会話形式は、ともに複数の言語をもつ複言語話者が、互いの「部分能力」を認め、それを肯定的に受け入れる土壌において生じる、共生のコミュニケーションなのである。

## 3. 内容と方法

調査は、2015年から2017年にかけてブータン全国の9つの市場で交わされる商人と客間の420の会話を対象に、観察調査と半構造化インタビュー調査を併用する形でおこなった。観察調査では、商人と客のやり取りを観察し、どの言語がどのような目的で用いられているか、呼びかけから商談、世間話へと展開するなかで、特に話者交代に伴う言語の切り替えと複数言語の併用状態がどのように展開していくかを調査した。インタビュー調査は、観察後その場で商人と客にインタビューを依頼し、その直前の会話における言語選択の理由、切り替えに対する意識、当該市場の言語使用に対する認識、インフォーマントの背景状況(第一言語と使用可能言語、レベル)を聴取した。さらに全国的な人びとの移動が活発化するなか、各市場の言語状態がその市場が位置する地域の地域性(住民の特性)をどれほど反映しているかを明らかにするために商人と客の出身地、現在の居住地と居住年月を聴取し、当該市場の商人と客の構成と、その市場の地域との関連性の強弱にも着目した。そして全国の9つの市場を比較し、地域性が希薄な市場(地区外住民が多数を占める市場)と地域密着型の市場(地区内住民が多数を占める市場)に分類した。今回の発表では、商人も客も全国からの行商人や仲買人、週末の買い出しの客等、地域性が薄く(他地区出身者が商人85%、客81.2%)、9つの市場の平均に最も近い形、ブータンの標準的な言語状態を呈する市場として、ティンプー郊外に位置するブータン最古で最大の総合野菜市場王制百周年記念市場を取り上げ、そこで展開される「相互乗り入れ型」(泉 2009: 44)会話に着目する。

## 4. 結果

### 4.1 切り替え1と切り替え2の発生

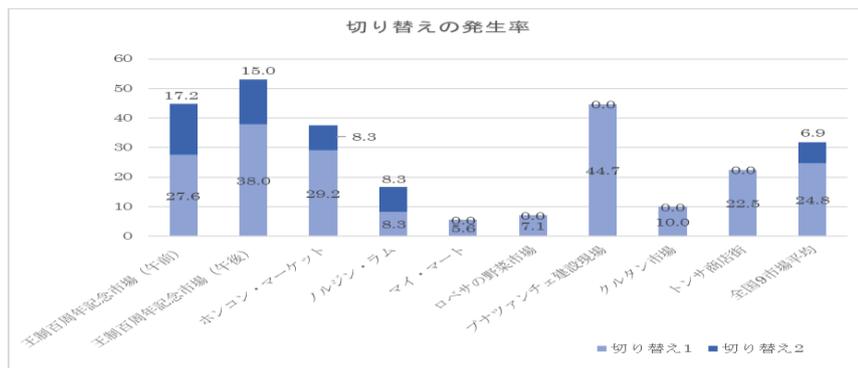


図1 全国市場：観察された切り替え  
 王制百周年記念市場(午前)：切り替え1—27.6%、切り替え2—17.2% —全体44.8%  
 王制百周年記念市場(午後)：切り替え1—38.0%、切り替え2—15.0% —全体53.0%  
 比較(ティンプー市内)  
 ホンコン・マーケット—全体37.5% ノルジン・ラム—全体16.6% マイ・マーケット—全体5.6%

図1は、全国の市場における言語切り替えの発生率を示す。発話1から発話2の間に生じた切り替えを「切り替え1」、切り替え1に続いてさらに発話2から発話3においても再度生じた切り替えを「切り替え2」とする。王制百周年記念市場では午前にはゾンカ語と各種民族語の切り替えが大多数を占めたのに対し、午後になるとインド人客が増えることが影響しゾンカ語とヒンディ語の切り替えとなる。同じティンプー市内でも下町のホンコン・マーケットではゾンカ語と広域民族語(ネパール語、シャーシヨプカ語)の切り替え、メインストリートのノルジン・ラムではゾンカ語と英語の切り替え

が主体となる等、市場により発生率も、その内実も多様である。長期滞在の移民家族が住む低所得者用集合住宅地に位置するマイ・マートでは、商人と客共に民族語話者であるが切り替えはほとんど起きずゾンカ語に徹して会話が観察される。

#### 4.2 切り替えの内実

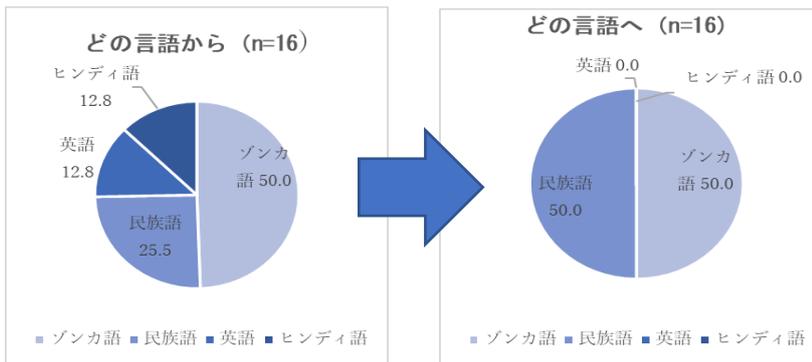


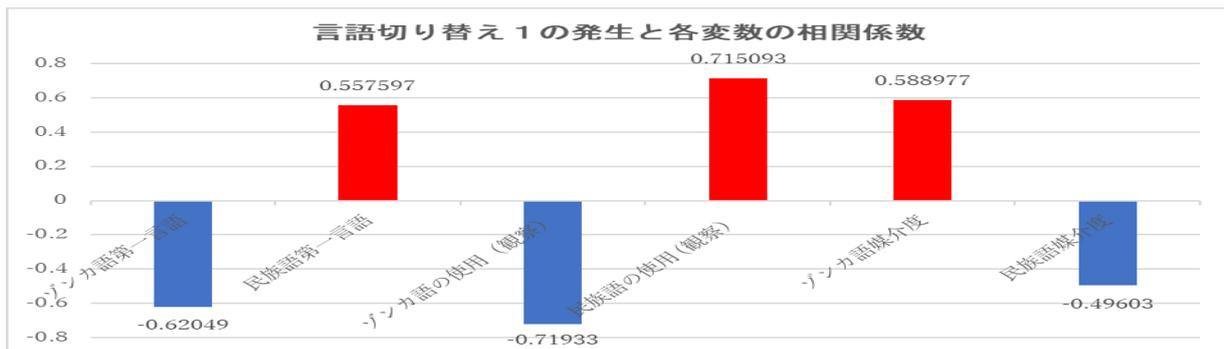
図2 「どの言語」から「どの言語」へ

王制百周年記念市場（午前）では、切り替えは、(1) ヒンディ語・英語・民族語からゾンカ語へ、(2) ゾンカ語から民族語への2パターンが観察された。

#### 4.3 各種変数と切り替え発生度の相関性

切り替え1の発生率とその他の変数—商人と客の第一言語、実際の使用言語、ゾンカ語媒介度、等—の相関性を計算した。結果、正の相関性をもつのは、民族語第一言語話者率、民族語使用率、ゾンカ語媒介度であり、負の相関性をもつのはゾンカ語第一言語話者率、ゾンカ語使用率、民族語媒介度であった。これは、切り替えの発生が、非ゾンカ語第一言語話者が多く（ゾンカ語媒介度大）、かつ民族語第一言語話者が民族語とゾンカ語を実際に使用してやり取りする状況で、ゾンカ語と民族語の切り替えという形で多発している状況を考えると理解可能である。

#### 4.4 切り替えの5つのパターン



王制百周年記念市場では、5つの会話パターンが観察された。パターン1はゾンカ語のみ、パターン2は民族語のみで切り替えが起こらないものである。パターン3は切り替えが1回のみで以後、ひとつの言語—ゾンカ語/広域民族語/民族語—に収束される。典型的なのは、切り替えを2回含むパターン4とパターン5である。パターン4は、切り替えが2回生じ、以後、ゾンカ語と話者の民族語の2つの言語の「相互乗り入れ型」（泉 2009: 44）となる。パターン5は切り替えが2回生じ、以後、ゾンカ語と広域民族語（第3の媒介語）の2つの言語の「相互乗り入れ型」（泉 2009: 44）となる。以下、パターン4とパターン5の事例を示す。いずれもこのあと2言語の並行使用として会話は続いた。

#### パターン4 <ゾンカ語-民族語-ゾンカ語>

商人: khasha-do lakpä tha-thap  
この布は手織りですよ。  
客: nga di mi nyo gaci-mo\*\*\* (シャーショブカ語).  
いらないですね。だって(値段が)高すぎるよ。  
de-be-wa-cin . . .  
それでは . . .  
商人: de-be-wa-cin . . . zhän gaci zhe-ni-mo  
それでは? ほかに何か。  
客: de-be-wa-cin . . .\*\*\* (シャーショブカ語)  
では . . . シャツはありますか。  
商人: yä-la togö-lu . . .  
ありますよ。シャツは . . .

#### パターン5 <民族語1-ゾンカ語-民族語2>

客: \*\*\*\*\* (ケンカ語)  
どうも今一つかなあ、別の、もっと安いのがいいんだけど。  
商人: di-mato meng 'ani da 'aphe chora-the  
これしかありませんよ、これもあれも、同じですよ  
客: \*\*\*\*\* (シャーショブカ語)  
もっと安いを見せてください。

**パターン4**—この事例で商人は、まずゾンカ語で呼びかけた。「いちばん無難だと思ったから」という。商人のゾンカ語に対して客は、「だって・・・」とゾンカ語で応じたものの、その後、半ば一人言のように自身の第一言語であるシャーショプカ語が出てしまったという。この事例では、商人はシャーショプカ語を理解はできるが自分から発するほどの言語力をもたなかったため以後、客はシャーショプカ語、商人はゾンカ語という「相互乗り入れ型」(泉 2009: 44) の会話展開となった。互いに相手の言語について十分ではないが、市場の取引は「やる事が決まっている」ため、それが会話のフレームとなって能力の不足を補い、会話を成立させたものである。

**パターン5**—この事例で客は、自分の第一言語であるケンカ語で話しかけた。商人は、客のケンカ語を理解できなかったが、客が別の品物を探していることを察し、ゾンカ語で応じた。客は、ゾンカ語は得意ではなく、避けたかった。そこで自分の小さなケンカ語よりも広域民族語であるシャーショプカ語なら通じるかもしれないと考え、以後シャーショプカ語を用いた。商人は、シャーショプカ語を理解はできるが話すことはできない。したがって以後、商人はゾンカ語、客はシャーショプカ語という第3の言語で会話は展開していった。

#### 4.5 切り替えが生じる背景要因

王制百周年記念市場では、商人は流れる客の足を止めるために最大公約数的にゾンカ語を用いて客に呼びかけ、その後客の言語に切り替えることで心情を掴んだり、自身に有利に商談を運ぶために自身の言語を選択するという、「戦略的言語切り替え」(寺尾: 2014) が典型的に観察された。言語切り替えが全会話の 27.6% 発生しただけでなく、そのまま複数の言語が並行して用いられ、話者双方による言語の相違を内包した形で会話が進行する「相互乗り入れ型」への進展が全体の 17.2% 観察された。商人と客を合わせた平均年齢は、51.5 歳であり、学校教育をもつ割合は低い、いずれも市場での商売や生活のなかで複数の言語能力を身に付けてきた人たちである。

観察調査とそれに続くインタビュー調査から、切り替えの多発、特に「相互乗り入れ型」(泉 2009: 44) 会話の発生を促す4つの要因が明らかになった。第1は、商人と客の言語レパートリーの広さと言語によるレベル差、および「部分能力」の相補的状況 (Grosjean 2008) である。王制百周年記念市場では、商人と客の双方の「商売可能レベル」の複言語率 (言語レパートリーの広さ) は高く、商人 280% (1 人平均 2.8 言語可能)、客 240% (同 2.4 言語) であった。実際には、「相手の話を聞く分には理解できる (受容能力)」が「自分が発するには心もとない (産出能力)」という人も含めると、相互に理解可能なレベルでは、商人と客でかなりの多様な言語の組み合わせに対応可能となる。この受容能力と産出能力の差の存在、すなわち言語によって4技能にレベルの相違があり、複数の言語が「部分能力」の相補的な関係としてひとりの複言語話者のなかで共存することが、話者双方が互いに異なる言語で発話する「相互乗り入れ型」(泉 2009: 44) 会話を促す要因となっている。第2は、部分能力を支える市場の場の「フレーム」である。インタビュー調査からは、「市場はやる事が決まっているから」という意見が多く聞かれ、モノとモノの交換を基本とする市場の「場」の特性が「枠組み」となり、言語能力の不足を補っていることが明らかになった。第3は、商人と客の市場独自の人間関係である。モノの売り手と買い手という市場独自の人間関係が、商人に、相手 (客) の言語を受け入れる寛容さを生み出している。第4は、商人と客が共にもつ「現在は過渡期である」という認識である。学校教育の普及に地域や世代の格差があるという時代認識と、全国的な人の移動が活発化するなか、ここティンピーには全国の民族地区出身の異なる言語背景をもち、その多くが教育を受けていない世代であるという状況認識が、互いに相手の異なる言語を受け入れ、また自分の異なる言語も受け入れてもらえるであろうと考える、多言語性に対する相互の寛容性に対する信頼を生んでいる。

#### 結論

ブータンの多言語市場で標準的に観察される多言語会話、なかでも特に「相互乗り入れ型」(泉 2009: 44) 会話は、ブータンの伝統的な豊かな多言語状態と人びとの高い複言語能力、教育の普及のムラと人びとの全国的移動が進む過渡期的状況、およびそれに対する認識が生み出す「多言語性」や「ハイブリットな状態」に対する寛容さ、さらに言語能力の不足を補う市場という場の特性や、商人と客の独自の関係性といった、複数の原因が折り重なって実現されたものである。ヨーロッパでは、個人における複数言語の習得とその使用に着目した複言語主義 (Coste, et al. 2009: 11) が提唱され、新たな教育体制として着目されている。見方を変えれば、それは、ブータンにおいて、教育を受けていない人びとが伝統的に育み、実践してきた言語姿勢である。ブータンの草の根の寛容な言語姿勢と時代認識が生み出す独自の共生の形である。

#### 参考文献

- 泉 邦寿 (2009). 「複数言語使用における媒介」 木村護郎クリストフ・渡辺克義 (編) 『媒介言語論を学ぶ人のために』 pp. 42-63. 世界思想社.
- 砂野幸稔 (2012). 「多言語主義再考」 砂野幸稔 (編) (2012). 『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』, pp. 11-48. 三元社.